

博物館 Dictionary No.243

～あなたに語る・時代を超えて生きる心～
 てんじ かいせつ
 展示中の作品について、研究員がわかりやすく解説します。

きらきらした仏像、 かंगाえる仏像

仏像、はじめは外国の神だった

日本に仏教が伝わったのは、552年でした（538年という説もあります）。
 日本のお隣、朝鮮半島にあった百済という国の王さまが、日本の欽明天皇に
 仏像をプレゼントしたのが始まりです。はじめて仏像をみた
 欽明天皇は「ほとけのかお、きらぎらし（仏像のお顔は
 整っていて美しいなあ！）」と感想を述べたそうです。
 日本の歴史書にそう書いてあります。

でも、見たこともない外国の神さまをどのようにおまつり
 したらいいのか、欽明天皇はとても悩んだあげく、結局
 は別の人にプレゼントしてしまったのですが……。

きらきらした仏像

そのときの仏像は、まぶしく光かがやく
 仏像でした。黄金の仏像、と言いたいの
 ですが、そうではなく、銅でつくられて、メッ
 キという方法で表面だけを金色に仕上げた
 ものです。どのように金色をつけたので
 しょうか？ ちょっと難しいですが、古代
 の金メッキは水銀アマルガムという方法が
 使われました。水銀は猛毒です。最近ではあ
 まり見かけなくなりましたが、ひと昔前は
 体温計には水銀が使われていました。体温
 計が割れると中から水銀が出てくるので危
 ないよ、とよく言われたものです。



重要文化財 菩薩半跏像 奈良時代・8世紀 岡寺蔵

銅でつくって金メッキをした仏像を、「金銅仏」といいます。聖徳太子しょうとくたいしが生まれた飛鳥時代あすかじだいから、奈良の大仏だいがつくられた奈良時代ならじだいまで、たくさんの金銅仏がつくられました。実は奈良の大仏も大きな金銅仏です。あれだけの大きな仏像も、水銀を使って金メッキをしたので、つくった人たちの健康が心配になります。

この夏は飛鳥時代あすかじだいから奈良時代ならじだいの金銅仏をまとめて展示します。その多くは黒ずんだ色をしていますが、よく見ると、ところどころに金色が残っているのがわかると思います。

かんがえる仏像

さて、ここで1体の金銅仏しょうかいを紹介しましょう。奈良県明日香村ならけんあすかむらにある、岡寺おかでらの「菩薩半跏像ぼさつはんかぞう」です。菩薩ぼさつとは、出家して、ほとけになるために修行している人のことです。人間のなやみ・苦しみを救うことが修行になるのです。ただし、まだほとけになっていないので、豪華な冠ごうかや装飾品かんむりを身に着けています。

この仏像すがたの姿をみると、右足を左のひざすがたにのせて、足を組んでいますね。このように、片方の足だけを組んでいる姿を「半跏はんか」といいます。そして、右の手をほおすがたにあてて、何かを考えこんでいるような姿すがたです。まさに、どのようにみんなを救おうかと思いをめぐらせているところです。おだやかな表情で、わずかにほほえんでいて、菩薩ぼさつのやさしさが伝わってきます。



重要文化財 菩薩半跏像ぼさつはんかぞう（部分）奈良時代・8世紀 岡寺蔵

かたい銅でつくられているのに、ほおや指先、スカートのしわなど、とてもやわらかな感じがします。それは銅の仏像のつくり方によるものです。金銅仏のつくり方を言葉で説明するととても難しいので、一目でわかる模型もけいをつくりました。みなさんに紹介するのは少し先になりますが、文化財のレプリカや材料の見本などのはいったハンスオン教材「ミュージアム・カート」のひとつとして準備を進めています。博物館のなかで見かけたら手に取ってみてください。金銅仏の重さにびっくりすると思います。

（美術室 竹下 繭子たけしたまゆこ）